

ガラスの山 フランス

昔むかし、あるところに、狩りの好きな伯爵はくしやくがいました。

あるとき、伯爵は狩りに出て、静かな池のほとりに立っていました。すると、白鳥が三羽飛んできました。近づいて見ていると、白鳥は羽衣はくろもを脱いで美しい娘になりました。

伯爵は、かけ寄って、いちばん若い娘の羽衣をぬすみました。そして、娘に自分のマントを着せかけて城に連れて帰りました。

城に着くと、伯爵は、娘に美しい服を着せて、自分の妻にしました。妻は、

「わたしは、羽衣を見たらさいご、すぐにそれを着てここから飛びさり、白鳥になって暮らさなければなりません」といいました。そこで伯爵は、羽衣を大きな衣装箱にしまい、鉄の錠じょうを取りつけました。そして、かぎを母親に預けて、だれも衣装箱に近づかないように気をつけ、かぎを大切にしまっておいてほしいといいました。

やがて、伯爵と妻には子どもが三人生まれました。

ある日のこと、伯爵が狩りに出かけているとき、伯爵の母親が、衣装箱の中を見たくなって、がまんできずに、かぎを開けてしまいました。中には、雪のように白い白鳥の羽衣が入っていました。

そこへ、妻が来合わせて、羽衣を見つけました。妻は大声をあげて羽衣を身につけると、たちまち白鳥になって窓から飛びだしていきました。妻は飛びさりながらいいました。

「わたしは魔法をかけられた王女です。わたしに会いたいならガラスの山まで来なくてはなりません。そう夫に伝えてください」

白鳥は飛んでいってしまい、母親はなげき悲しみました。

伯爵は、狩りから帰ってきましたが、妻はどこにもいません。母親から、妻が白鳥になって飛びさったと聞くと、手で顔をおおって泣きました。そして、子どもたちを母親にあずけて家を出ました。たとえ世界の果てまでも、妻を探しに行こうと思ったのです。

一日とひと晩歩くと、森の奥でひとりの隠者いんじゃに会いました。隠者はまだ見たことがないほど年をとっていて、雪のように白いひげを生やしていました。伯爵が、

「ガラスの山を知りませんか」とたずねると、隠者はいいました。

「わしもほうぼうめぐり歩いたが、ガラスの山は知らないな。だが、わしの兄さんは、

わしよりもっとたくさん世の中を見ているから知っているかもしれない。兄さんとはもう二百年も話をしていないが、もし行くんなら、この指輪を持って行って、わしからの指輪をあずかった、助けてほしいといいなさい」

隠者は、赤い石の指輪をくれて、ひと晩泊めてくれました。

つぎの日、伯爵はまた旅を続け、やがて、とても小さな小屋に行きつきました。小屋にはたいそう年とった隠者がいて、伯爵が指輪を見せると、それは弟の指輪だいいました。そして、

「わしも、ガラスの山は知らないな。だが、わしの兄さんなら知っているかもしれない。兄さんは、山をずっと上がっていったところに、氷と雪の中で暮らしている。あそこなら、ガラスの山があるかもしれない。この指輪を持って行って、助けてほしいといいなさい」といって、青い石の指輪をくれました。

伯爵は、赤い指輪と青い指輪を持って、北をめざして歩きつづけました。

やがて、森のはずれまで来ました。岩の下に死んだ牛が横たわっていて、その前に、ライオンとグレーハウンドと、わしとありが座って、牛をどう分けるかで言い争っていました。グレーハウンドは、伯爵を見ると、牛をどう分けたいか教えてくれといいました。伯爵は、しばらく考えてからいいました。

「ライオンは肉が好きだから、肉を取るといい。犬は骨をしゃぶるのが好きだから骨を取るといい。ワシははらわたが好きだからはらわたを取って、ありは、頭をもらえば、食ったあとその中に住めるじゃないか」

すると、けものたちは喜んで、自分の取り分を食べはじめました。

伯爵はまた先へ歩いていきました。

とつぜん、うしろで、ハアハアという声が聞こえました。ふり向くと、グレーハウンドが追いかけてきていいました。

「急いで引っ返してください。ぼくたち、忘れていたことがあるんです」

「おまえたち、まだもんくがあるのか」

「いいえ。あなたにお礼をするのを忘れたんです」

伯爵が引き返してくると、動物たちはそれぞれに贈り物をくれました。ライオンは、しっぽから毛を一本抜いていいました。

「何か困ったことが起きたり、特別な力が必要になったりしたとき、この毛をあなたの

髪の毛の中に入れるんです。ぼくと同じくらい強くなります」

グレーハウンドも、毛を一本抜いて、

「この毛をあなたの髪の中に入れて、ぼくの三倍も速く走れるようになります」といいました。わしは、羽を一本抜いて、

「この羽を帽子にさせば、好きなだけ高く飛べます」といいました。ありは、足を一本むしって、伯爵に渡し、

「これを使えば、ぼくよりも体を小さくすることができます」といいました。

伯爵は、ライオンの毛とグレーハウンドの毛とわしの羽を皮袋かわふくろにしまつて首にぶら下げました。ありの足は金の小箱に入れました。それから、また歩きだしました。

森のそばまで来ると、また一軒の小屋がありました。小屋には、おそろしく年とった隠者がいました。伯爵が、ふたつの指輪を見せると、隠者は喜んで、

「やあ、あいつら、まだ生きているんだな」といいました。伯爵が、ガラスの山がどこにあるかたずねると、隠者は、長いあいだ考えこんでいましたが、やがて話しました。

「もうずっとずっと昔のことだが、ガラスの山のことを聞いたことがある。そこにはひとりの王さまがいて、もう何千年も前に三人のお姫さまといっしょに魔法にかけられたそうだ。七つ頭の竜が見張りをしていて、王さまは外へ出られない。だが、お姫さまたちは、年にいちど夏至げしの日に、白鳥の姿になって世の中へ飛び出すことが許されている。王さまたちを救うことは簡単じゃない。山はガラスのようにつるつるで、登ろうにもかまるものはないし、山のてっぺんの入り口はせまい割れ目になっていて、せいぜいありくらいしか入りこめない。しかも恐ろしい竜が見張っている。ありでいながら、ライオンの強さとグレーハウンドの速さ、そしてワシの翼を持っていなくてはだめなのだ。とても人間にできることではないよ」

伯爵はこれを聞くとひそかに喜びました。そして、ひと晩泊めてもらって、つぎの朝、ガラスの山に向かって旅立ちました。

歩いていくうちに太陽がしみみました。そのとき、はるかかなたに太陽を千個も集めたようなきら輝くものが見えました。それが、ガラスの山でした。伯爵は、ワシの羽を取りだして帽子にさしました。そのとたん、伯爵は空高くまいあがり、山のてっぺんまで飛んでいきました。そこに、せまい割れ目がありました。伯爵は、金の小箱から

ありの足を取りだして、ありに姿を変え、割れ目の中に入っていました。すると、すばらしく美しい城がありました。伯爵は、ありの姿のまま城に入っていました。広間まで来ると、おそろしく年とった王さまが玉座ぎよくざに座っていました。ありは、気づかれずにそこを通り過ぎました。つぎの広間に入ると、ふたりの美しいお姫さまが座っていました。もっと先へ進んでいくと、三つめの広間がありました。そこに妻がいました。妻は、窓辺まじえに座って遠い木々のかなたをながめながら、ため息については涙を流していました。伯爵はもとの姿にもどり、妻の後ろに立ちました。妻はふり向き、ふたりは大喜びしてだきあいました。

伯爵は妻に、

「食事のとき、あなたのお父さまに、ここから逃げだすにはどうすればいいか聞いてくれないか」といいました。そして、自分はあるになって、妻のそで口にかくれました。

王さまたちが食卓についたとき、妻はいいました。

「お父さま、あたしたちを魔法から救いだせる人はいるのかしら」
王さまは、

「たぶんだれにもできないだろう。難しすぎるからな」といいました。

「じゃあ、わたしたちを救うには、どうすればいいの」

「まず、見張りをしている竜を殺さなくてはいけない。だが、あいつには頭が七つあって、ひとつかふたつ切りおとしてもまだ生きている。頭をぜんぶ切りおとしたら、最後の首の切り口から三本足の白いうさぎがとびだすんだ。そのうさぎを殺すと、うさぎの頭から、白いはとが舞いあがる。そのはとの心臓の中に紅い玉がある。それを、ガラスの山のとっぺんの割れ目から、城の屋根の真ん中に投げ落とさないといけない。それも、教会の鐘が朝をつげ、草にまだ露が光っているときにやるんだ。だが、こんなことはだれも知らないだろう。この山に入りこめるのは、せいぜいありくらいのもんだろうから」
食事がすむと、妻は部屋にもどり、伯爵はもとの姿になりました。そして、必ず助けるからという、ふたたびありになってガラスの山から出ていきました。

伯爵は、山のもとの地主のところへ行つて、羊飼いとしてやとわれました。地主は、ガラスの山には七つ頭の竜がいるから気をつけるようにといました。伯爵は、「へいきですよ」といって出かけ、マントの下に剣けんを隠して羊の番をしました。

しばらくすると、七つ頭の竜があらわれ、羊を見ると、大きな口を開けておそいかか

ってきました。伯爵は剣を抜いて切りかかりましたが、竜を殺すことはできません。へとになってもう倒れそうになったとき、ライオンの毛を思い出しました。伯爵がライオンの毛を自分の髪の毛の中に入れると、たちまちライオンの力がみなぎって、ものすごい戦いになりました。とうとう、竜の首をぜんぶ切りおとしました。すると、最後の首の切り口から、三本足のうさぎがとびだしました。伯爵は、すぐにグレーハウンドになって、うさぎを追いかけて、つかまえてかみ殺しました。すると、うさぎの頭から白いはとがとびだして、矢のように空を飛んでいきました。伯爵は、たちまちわしになって追いかけて、つめではとをしめ殺しました。するとその心臓から紅い玉がころがり落ちました。伯爵がかみこんで紅い玉を拾うと、そこはちょうどガラスの山のでっぺんで、目の前に割れ目がありました。そのとき、朝の鐘の音が聞こえました。伯爵は、紅い玉を、城の屋根の真ん中に投げ落としました。そのとたん、おそろしい音がして、そこらじゅうに煙が立ちのぼり、何かがガチャガチャと割れる音がひびきわたりました。気がつくと、ガラスの山がくずれ、美しい庭園の真ん中に城が立っていました。城の中から三人のお姫さまが飛びだしてきました。末のお姫さまは、伯爵にかけよってキスしました。

「この人がわたしの愛する夫よ。わたしたちみんなを救ってくれたのよ」

つぎの朝、伯爵は、黒い馬に引かせた六頭立ての馬車にみんなを乗せて国に帰りました。子どもたちも年とった母親も大喜びしました。

それからのち、伯爵と妻は幸せに暮らしました。まだ死んでいなければ今でも生きています。

おしまい

村上郁再話